



信楽壺 室町時代 高35cm

# 内田 鋼一

陶芸家

信楽は中世の古窯のひとつだけれど、産地としては小さかった。作り手も半農半陶だったろうし。土も、耐火度が高くて多少むりな焼きかたをしても割れないというよさはあるけれど、粗いので、液体を貯めておくにはむかなかった。だから種壺が多くて、瓶はほとんどない。需要もせいぜい近隣だったろうから、生産量は多くなかったと思う。

この白い壺も信楽。この手の白い信楽はほかに鉢、片口もある。陶片も出土する。これを見て、焼きがあまりのかと訊く人がいるけれど、そうではない。けっこう焼けていて、素焼の白ではない。

あきらかにあえてこの色にしていると思う。信楽のふつうの焼きかたをすると、かならず火色が出るから。わざわざいつもとちがう焼きかた、須恵器系の還元焼成にしている。なぜそうしたかはわからない。

ものを見るときに、古いかどうかはあまり気にしない。古信楽についていえば、ビードロとか焦げとか明るい火色といった、骨董の世界で評価される見どころがむしろないものにひかれる。

マリにしばらくいたときに、こんなことがあった。土器づくりは女性の仕事で、注文をうけると全員がおなじものをつくる。寸法も厚みも重さも、焼きかたも一緒。それでも、あるひとりのおばさんのつくるものがいつも好きだった。教えられなくても、ものを見ればわかった。かたちはほとんどおなじ、地面に落ちた影では区別できなかったから。

やっぱり人が出るんだなと思った。人が手で作るものには。そこが、僕らの仕事とプロダクトのちがいかもしれない。あいまいで、なんとなくの差かもしれないけれど、大切にしたい。



Kouichi Uchida